



連載

常陸時代の佐竹氏
— 500年の軌跡を追う —「五本骨扇に月丸」
の佐竹氏家紋

【第15回】

沼尻合戦と北関東の盟主

1 三毳山南麓に古戦場跡

水戸市から国道50号を栃木県佐野市方面へ向かう。同県栃木市に入ると、右手正面に三毳山（標高230㍎）が見えてくる。国道沿いの「道の駅みかも」を過ぎると、間もなく東北自動車道「佐野藤岡IC」である。三毳山付近の国道50号から南方約3㍎先を渡良瀬川が流れている。そこまでは平坦地が広がっている。渡良瀬川は「渡良瀬遊水地」を経て埼玉県加須市と茨城県古河市付近で利根川に合流している。

戦国時代、この三毳山から渡良瀬川までの平坦地で佐竹氏を北関東諸将の盟主に押し上げた戦いがあった。その名を「沼尻合戦」という。佐竹氏を中心とした北関東連合軍と小田原の北条氏（後北条氏）が対戦した歴史に残る大戦である。同合戦が行われた場所は今の栃木市藤岡町。その跡は現在、畑地や水田、宅地となっている。藤岡町の西隣は群馬県邑楽郡板倉町。上野国である。

渡良瀬川をはさんで西は上野国、北は下野国。南は武蔵国。この地は下野国の南端部に位置し、上野国と接する国境の地。戦国時代末期の天正12年（1584）、関東で絶大な勢力を誇っていた北条氏5代当主、氏直は大軍を引き連れ渡良瀬川を越えた。この大軍を迎えうった北関東連合軍の盟主が「鬼義重」の異名をもつ佐竹氏19代当主の義重である。

2 戦国の名将、次々に逝く

佐竹氏が南奥（福島県白川郡棚倉町以南地域）に進出していた頃、相模国の小田原城（神奈川県小田原市）を拠点とする後北条氏は関東制覇に向け動きだしていた。その攻勢にはずみをつけた出来事が天正6年（1578）に起きた。「越後の虎」と恐れられた上杉謙信の死去である。謙信は越後国の春日山城（新潟県長岡市）を拠点に関東

諸将から救援要請を受けると、出陣をいとわない関東の盟主的存在であった。

謙信は「長尾景虎」と名乗っていた永禄4年（1561）、小田原城を包囲し、勢力拡大を狙う後北条氏4代当主氏政を攻めた。氏政は反撃し、事なきを得たものの謙信の存在は、後北条氏にとって脅威であった。その謙信が亡くなった4年後の天正10年（1582）、今度は甲斐の武田信玄の後を継いだ武田勝頼が織田・徳川連合軍に敗れ、天目山（山梨県甲州市）で自刃した。

さらに武田氏滅亡からわずか3か月後の同年6月、織田信長が本能寺（京都府京都市中京区）で明智光秀に討たれた。天下に名を轟かせていた信長まで時代から消えた。こうした情勢の急変は、後北条氏にとってみると、「前門の虎上杉謙信、後門の龍織田信長の脅威」（『茨城県史＝中世編』）が消えたことを意味する。以後、後北条氏は宿願の北関東制覇を目指し、本格的な攻勢に討って出た。

3 国境の「沼尻」に両軍結集

後北条氏の矛先は、上野国に向けられた。北条氏直は天正11年（1583）、上杉氏が関東遠征時の拠点とした厩橋城（群馬県前橋市）を攻撃。同城は戦略的要衝に位置するため城主の入れ替えが激しかった。氏直はここを抑え、上野国の西半分を支配下に置いた。しかし、上野国東半分は名城・唐沢山城（栃木県佐野市）の佐野氏を始め、敵対勢力が存在していた。

佐野氏は佐竹氏とよしみを通じていた。後北条氏の本格的な北関東進出は佐竹氏にとっても容易ならざる事態であった。『茨城県史＝中世編』は「天正10年には北条氏直の大軍が、親佐竹側として行動してきた宇都宮国綱に攻撃を加えるに至って、佐竹氏をはじめ北関東領主たちはかつてない危機に直面していた」と述べる。天正10年は「本能寺の変」が起きた年に該当する。佐竹氏は南奥に

だけにかかわってはいられない事態となった。

佐竹義重は天正10年10月、「上州に出陣し、館林や太田を数日間攻め、古河・栗橋に陣を移す」（『茨城県史年表』）という動きをみせている。『佐竹家譜』は義重の天正12年（1584）4月の条で「北条氏直、皆川広照を野州沼城に攻めて、藤岡に陣す。義重、広照を救いて同国大田^{おおだわ}和出陣。氏直と相挑む^{いど}」と記す。「野州」は下野国、「大田和」は栃木市藤岡町大田和のことである。

4 佐竹連合軍、鉄砲「8000丁」

両軍は同市藤岡町の渡良瀬川左岸（河口に向かい左側）で対陣した。同町内には「沼尻」「陣場」「木戸内」等の小字名が残っている。両軍の軍勢は佐竹側の武将太田資正^{すけまさ}の書状に以下のように記されている。「敵・味方共に大軍。南衆を無衆^{むしゆ}の様に及ばる見方も候。相・武・上・両総・房の衆、何れも自身と聞こえ候」（『藤岡町史資料編古代・中世』収録）。「南衆」は北条氏直軍を指す。

これを見ると、後北条側は相模・武蔵・上野・下総^{かずさ}・上総^{あわ}・安房の6カ国の領主自らが出陣している。その「数」は「無衆」とし、わからない、と述べている。数が多くて、どのくらい的人数か不明ということであろう。これに対し佐竹側は、宇都宮氏、結城氏、皆川氏、江戸氏など常陸・下野国の在地領主を中心とした軍勢となっている。

注目される点は佐竹側の鉄砲の数である。『茨城県史＝中世編』や『常陸太田市史』は参陣した武将ごとに持参した鉄砲数を表にしている。「東1100挺」、「御旗本」・「下妻」共に各「1000挺」、「結城」・「宇都宮旗本」それぞれ「300挺」などとある。各武将の鉄砲を合計すると、8590挺にのぼる。他に会津の輩名氏^{あしな}も鉄砲を送っている。織田・徳川連合軍が天正3年（1575）の「長篠^{ながしの}の戦い」で用意した鉄砲は300挺とされている。

5 小牧・長久手の戦いと連動

沼尻合戦について『藤岡町史通史編前編』は、この戦いが全国的な政治状況を反映した合戦だったことを明らかにした。信長亡き後、天下取りに動いた羽柴（豊臣）秀吉と対抗した徳川家康は天正12年（1584）、愛知県西部の「小牧・長久

手」で戦った。『藤岡町史』は、関東と関西で同時期に行われたこの2つの合戦が連動していたと指摘する。佐竹氏は羽柴秀吉と後北条は徳川家康と繋がっていた、と述べている。

羽柴秀吉が佐竹義重に送った書状にこうある。「貴国境目に至り、北条氏直取り出し候につき、義重差し向かわれ、今に御対陣の由に候。併せて去んぬる年に仰せ上げられる筋目を以て、かくのごとく即ち承り届候。（以下略）」。前段で義重から秀吉に沼尻で北条氏直と戦うことになったとする報告があったことがわかる。しかも、義重は「去んぬる年」、つまり前年から秀吉と繋がっていたことがこの文言から判明する。

沼尻合戦を論じた『戦国の終焉^{しゅうえん}』（中央公論新社発行）の著者、斎藤慎一氏は、こうした背景を踏まえ「合戦の勝敗は現地での当事者だけで決定できる状況ではなく、中央の情勢が左右するようになっていた」と指摘する。2つの戦いはともに「和睦」で終止符を打った。義重にとって沼尻合戦は、地方が中央と連動した中で動く時代に入ったことを実感させられた戦いだったといえるだろう。

歴史ジャーナリスト
茨城県郷土文化研究会会長
富山 章一



国道50号の「大田和西交差点」から渡良瀬川方面に伸びる県道282号（中藤岡線）沿いの平坦地。正面の三轟山から南側に広がるこのあたりが沼尻合戦の古戦場跡とみられる＝栃木県栃木市藤岡町